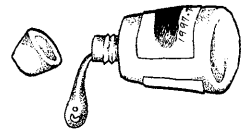


揺らぐ心 と 洗われる心



鍋島 恵美

せんせい さま

四歳児・五歳児と担任し、久しぶりに三歳児を受け持つことになった一九九五年四月。家庭的な雰囲気と明るさと優しさを大切にしようと呼育に望んだ。気分一新、私自身も淡い色の洋服と、フリルの

付いたエプロン姿に変身した。少しオシャレをしたのだ。装いは心まで変えると言われるが、まさしくその通り、今まで五歳児と共に活動的に動き回っていたのと違い、小さな、動きのゆるやかな三歳児との生活は、優雅でゆったりとした心地で始まった。そんな風が、私の周りに吹いていたのだろうか。「先

生様」と、私に呼びかけてくるM夫（新入の四歳児）に出会った。

保育者になってこのかた、初めて呼ばれる『先生様』、その言葉の響きに、一瞬戸惑いを覚えた。こそばゆくも感じた。と同時に、そう呼ばれると、背筋を改めてスーと伸ばさなくてはいけないような緊張感と、からだに走る清涼感とを味わった。不思議な感じだが、心がさわやかになっていくのを覚えた。そして、いい気分でもあった。

一方、M夫の担任は、それどころではなかった。彼は、アレルギー体質が強く、自分のからだに合わない物を口にする、ショック状態になるといふ子どもだったからだ。

私の幼稚園は、自由な保育であり、五感を通して環境に働きかけることを大切に生活をしている。園内には、飼育物や栽培物も多く幼児自らの手で世話をし収穫をし料理をして食べることが、日々の生

活の中でごく自然に行なわれて

いるのだ。それ故に、M夫に対する担任の心配りは大変なものだった。

ところが、担任する学年が一つ違うだけで、距離を少し置けることが、M夫に対する私の関わり方に、ずいぶん心のゆとりをもたらした。三歳児の子どもも、「お兄ちゃん」と、呼びかけて、まごとをしたり、誕生パーティーをしたり、絵本を読んだりと生活を共にした。四歳児の保育室の中とは違った表情のでるM夫だった。朝「おはよう」と、登園して持ち物を整えると、三歳児の保育室へ来るのが彼の生活の始まりだった。四歳児ークラスの人数にくらべると、ほぼ半数程の人数で、動きや声のひびきもずいぶん四歳児の室内とは違って穏や



かである。その雰囲気も家庭から入園してきたM夫にとつては、心地よかつたのだろう。そして、安定して人と関われる所が、三歳児の周辺だったのだと思う。

M夫の担任と連携し、私達保育者間では何ら問題はなかつたが、三歳児と過ごすM夫の生活を観て、彼の母は、「同年齢の仲間の中で遊ばせて欲しい」と、担任に申し出られたり、「我が子より小さい年齢の子どもと遊ぶことが、発達を阻害させるのでは」と、不安を訴えられたりした。私達の指導の方針を理解してもらえらるまでには、ずいぶん時間がかかり、すれ違ふままのところも多分にあつたように感じる。

いつの頃からか、「先生様」という呼び名から、誰もが呼ぶ「先生」という呼び名に変わっていった。自分の持つて生まれた体質も関係して、大切に保護されて育つた家庭から、幼稚園といういろいろな育

ちをしている人の中にあつて、彼自身が惑い獲得していった呼び名の変遷なのだと思つた。

さようなら

M夫が五歳児進級を迎えた一九九六年四月始業式の日。横に座つた私に、「さようなら、僕は、大きい組」と言つた。余りに唐突な一瞬の言葉に、驚いた。が、「大きくなつたんだ。彼の自立、宣告なんだ」と感じた。そう宣告することで、自分にも言いかせているようにも思えた。彼のその成長ぶりを素直には喜べなかつた。それは、言葉の表現として淋しく冷めたさを感じたからだ。私は、「さよなら、またね」と、別れる言葉だけでなく、「遊びたい時は遊ぼう」という心の思いをつけ加えた。人とのつながりというものは、そんなにサッパリと切れていくものではないということをM夫に伝えたかつた。私の心は、日本的、浪花節なのかもしれな

い。私も新たに入園児を迎え、今度は四歳児の担任になった。

かいぞく エミ

夏休みが明け、九月に入って園庭に出ていると、「鍋島先生、遊ば」と、声をかけられた。久しぶりのM夫からの呼びかけだった。「やあ!」という思いと、「どうしたのかしら」という思いが、私の心の中で一瞬交錯した。そして、「いいよ」と返事をした。「海賊船ごっこしよ。あのね、僕はフック船長。先生は何になる?」「そうね……私は『海賊エミ』になる」と、言葉を交わし、ジャングルジムを海賊船に見立てて遊び始めた。「海賊エミ先生、敵を打て!!」「えっ、私は海賊エミ、フック船長」と、私の呼び名を強調した。すると、「海賊エミさん」となった。彼の心の中の葛藤がわかるような気がした。M夫の育ってきた生活の中では、『先生』

という価値観は絶対的なものだったのだろう。先生に対して、遊びの中であっても、本人を前にして「海賊エミ」と呼び捨てにすることに抵抗があったのだと思う。

私達の遊ぶ姿を見て、我が四歳児の子どももやって来た。「何してるの? 寄せて(入れて)」とS夫やT夫が声をかけて来た。「海賊船ごっこよ。この人が、フック船長。私は海賊エミ。フック船長に聞いてごらん」と、五歳児のM夫と四歳児の彼らとの仲をとった。「いいよ」と、M夫の返事。その時から、私を核にしなから、M夫と四歳児の遊びが始まった。

M夫の母と話す機会があり、彼の遊びのイメージが、夏休み中に好きで見えていた『ピーターパン』のフック船長であることがわかった。それから、毎日海賊船ごっこが始まった。『ピーターパン』の絵本を何度も一緒に読んだ。大きなダンボール箱をつな



▲いちょうの木の下を海に見立てて

いで、海賊船を作っては遊んだ。

雨の日、テラスで遊んでいると、振り込む雨の水しぶきがかかり、まるで荒海の中を航海しているような気分だった。「波がきつい。船に水が入って来

た。気をつけろ」「わかった」「面舵いっぱい」

「あっ、水が入ってくる」「みんな、船の中にもぐれ」。ワーカーキヤート、M夫・四歳児の子ども達・

私といろんな声が重なりあった。そして、とうとう

その日は、雨でダンボールの

船が濡れポロポロになった。

本当に難破した船のようだった。

そして、みんなでその残

骸を「ヨイシヨ、ヨイシヨ」

と、消却炉まで運んだ。海賊

船乗り組員みんなの力が一つ

になっているのを感じた。こ

の頃になると、M夫は、「海

賊エミ」と自然に呼ぶようになった。

ある時、M夫のクラス仲間

のN夫達が、やって来た。

やって来たというより、押しつけて来た。M夫の表情がこわばるのがわかった。N夫達は、〇〇マンになって海賊と戦うつもりなのだ。四歳児でも体格のいいA夫が勇敢に戦い始めた。私は、おびえるM夫に、「フック船長、ここは逃げよう」と、つれ出し、便所に隠れた。しばらくして、「様子を見に行こう。Aちゃん大丈夫かな?」と出て行くと、A夫がワーワーと泣いていた。そばでなぐさめているK保育者から、「みんなが逃げた後、Aちゃん一人で戦って、やつけられはったのよ。かわいそうに」と、後の様子を伝えられた。私は、「ごめん、ごめんね。Aちゃん、悪かったわ。今度からは逃げないから、ごめん」と謝った。その場の状況を察したM夫の顔もすまなそうだった。五歳児と戦ったA夫の姿と、私の姿を見て、M夫の心は揺れただろうと思う。

毎日くり返して遊んだ海賊船ごっこ。四歳児の生



▲海賊船に乗って

活の中にもすっぽり入り込んでいた。十月、運動会を迎える頃には、海賊船に乗って出かけるという表現へと高まっていった。

その頃、四歳児のS夫やT夫達は、M夫の姿をみつければ、「フック船長」と、声をかけるようになっていた。そして、M夫も「やあ」と手をふるような「関係性」がでてきた。

あの人、前一緒に遊んでいた人

それから、またパタッと四歳児の保育室に顔を出さないようになった。そんなある日、五歳児の仲間と楽しそうに肩を並べて歩くM夫と出会った。その時、久しぶりに同輩との笑顔の彼を見たので、うれしくて二人の肩が入るように両手を開けて笑顔を投げかけた。すると、スーとその横を通り過ぎ、その友達に「あの人、前一緒に遊んでいた人」と、話しているのが聞こえた。「前遊んでいた人」と、その例え

ようがおかしかった。と、同時に、「なる程なあ」と感心してしまった。「そう言葉にすることで、友達と、同じ所に立てるんだなあ」と思った。「これも彼の自立、宣告なのだ」と理解できた。

いつも、ふと考えさせられる言葉を残していくM夫。クラス編成やクラス担任の枠を越えたM夫。その自由な保育環境の中で、私に語りかけてきた彼の言葉そのものが、彼の揺らぐ心のように思える。その心を通して、私自身の心が揺らぎ、とき澄まされ洗われていった。そんな彼との出会いだった。彼のことから航海は荒波が多々来るであろう。彼の言葉に感情が伴ってきた時、その航海が豊かな旅になるのだと思う。私は、M夫にとって「海賊エミ」でいたいとおもっている。

(京都教育大学教育学部附属幼稚園)